

## 男が詠む「待恋」 — 『百人一首』 翻訳論 —

カール・ロイ・オルショヤ  
KÁROLYI Orsolya (同志社女子大学大学院博士課程)

平安朝の和歌では、男が女の立場で歌を詠むことが普通に行われている。『百人一首』の撰入歌でもある素性法師の「今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」や藤原定家の「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」も明らかに女の立場で詠まれた歌である。しかし、単語上で詠み人の立場を明確にするものが詠みこまれておらず、作者が男であることから、男の立場で詠まれた歌と誤解する可能性が高い。平安時代においては「行く」（通う）のは男であり、「待つ」のは女であるにもかかわらず、「男が女を待っている」という平安貴族の風習と異なるイメージを読み取ってしまいかねない。そのためか、日本の『百人一首』本の殆どに「女の立場で詠まれた歌」という情報が加えられている。

しかし、『百人一首』の多数の英訳の中には女の立場から詠まれた歌として訳しているものが殆ど見当たらない。特に素性法師の歌の場合、男の立場から詠まれた歌と訳しているもの、あるいは詠み人の立場を明確にしない訳が多く見られる。そのため、英語圏では平安貴族の風習と異なるイメージができてしまうにもかかわらず、今まで和歌翻訳では問題にされてこなかったように思われる。

本発表では、現在までの『百人一首』英訳史を辿り、上述の問題がどのように処理されているかを検討したい。その上で、「詠み人の立場」についての今後の翻訳方針について私見を述べてみたい。

## 蕉風俳諧における「恋句」の特色

キム ミギョウ  
金 美京（筑波大学大学院博士課程）

連歌・俳諧（連句）において「恋」は、大事な題材の一つであり、一卷中に恋句がなければそれは「はした物」であるとされ、完成作品と認めないくらい、重要なものと認識されていた。

連歌・俳諧における恋句を考えると参考にすべきものとして「恋の詞」がある。「恋の詞」は連歌・俳諧用語で、その有無が恋句であるか否かの判断の基準とされたものである。俳諧に用いる「恋の詞」は、近世初期の貞門俳人たちによって出された俳諧作法書類の多くに掲載されていた。このように近世初期の俳諧における恋句では重要視されていた「恋の詞」であるが、『三冊子』（服部土芳著・元禄十五年（1702年））には「むかしの句は、恋の詞を兼ねて集め置き、その詞をつづり、句となして、心の恋の誠を思はざる也」とあり、「恋の詞」ではなく、「心の恋」を重視するという蕉風俳諧の立場が示されている。

本発表では、『三冊子』で確認できた蕉風俳諧における恋句についての記述に注目し、蕉風俳諧の恋句では本当に「恋の詞」が用いられなくなったのか、もし用いられているのであれば、どのような「恋の詞」が多いのか、またその用い方に特色は見られるのか、などについて明らかにしたいと思う。

すでに、蕉風俳諧における恋句の特徴を「恋の詞」との関係で明らかにしようとした先行研究として清登典子「「恋の詞」と蕉風俳諧」（『文藝言語研究文藝編（60）』、2011年）があるが、そこでの分析は芭蕉七部集入集の連句作品のみを対象としており、蕉風俳諧全体における恋句の特徴を把握するまでには至っていなかった。今回は、松尾芭蕉（1644-1694）が新しい俳諧を模索しは

じめたとされる天和年間から芭蕉晩年の元禄七年（1694年）までの期間における、芭蕉が一座した全連句作品を取り上げ、それらの連句中の恋句について「恋の詞」に注目しながら調査、分析を行うことで、蕉風俳諧における恋句の特徴を全体として提示することにした。

## ポスターセッション題目

大地としての生命力

——三島由紀夫古典主義期の作品における「下層への動き」——

<sup>トウ</sup> 藤 <sup>ムビ</sup> 夢激（東京外国語大学博士課程）

狂歌と彗星 —— 『古今夷曲集』 考

<sup>オオウチ</sup> 大内 <sup>ミズエ</sup> 瑞恵（東洋大学非常勤講師）

西周著「百学連関」にみる芸術理解について

<sup>エザキ</sup> 江崎 <sup>キミコ</sup> 公子（元国立音楽大学准教授）

法華寺蔵『七草絵巻』 考 —— 孝子譚の側面から ——

<sup>ヨコヤマ</sup> 横山 <sup>エリ</sup> 恵理（大阪工業大学特任講師）